

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA



水田寛《くさむら 12》2008（平成 20）油彩、キャンバス
「なつやすみの美術館4 生きている！」展より

なつやすみの美術館4 生きている!

2014年7月12日－9月23日



図1 深澤幸雄《めし》1956年

夏休みの間に、特に若い世代が美術に触れる機会を持って欲しい。そのきっかけとなるような展覧会として開催する「なつやすみの美術館」は、今年で4回目となりました。

美術への入口になるように、毎年違ったテーマを考えてきましたが、今年はタイトルを「生きている!」としました。

私たちが生きていることは、私たちが存在していることと重なります。誰にとっても関わりざるを得ない主題です。生きていることについて思いを巡らせるとは、私たちや他者の存在について考えることに他なりません。人間とはそのような思索を行う存在であり、人間が生みだしてきた文化の多く、あるいはすべてが、そのような思索を表現することに関わっていると言ってよいでしょう。美術はもちろんのこと、多くの文学、哲学、音楽等が、生きることに向きあう中から生みだされてきました。

そう考えると、「生きている!」という主題に関わらない作品などありようがないことになって、收拾がつきません。また、展覧会としてはできるだけ身近なできごとをあつかった作品から、その内容を読みとってもらえるように考え、4つのコーナーを設けて「生きている」ことに迫ろうと試みました。

最初のコーナーは「生きている 暮らしがある」。まず、食べることにまつわる作



図2 山野千里《流水祭り》2007年

品を集めています。生きることは食べることに支えられています。だからこさまざまな食事の場面が、生活の全体を代表するものとして描かれています。深澤幸雄の《めし》(図1)、ゴッホの《馬鈴薯を食べる人々》、ピカソの《貧しき食事》。いずれも決して明るい作品ではありません。そこには貧しさ、寂しさ、慎ましさといった、やるせない感情が通底していますが、一方で生き抜くために食べるのだという意思のようなものを感じとることもできるでしょう。

というふうに、この展覧会では、作者や時代や作風が違う作品をいくつか組み合わせ、共通するところと違ったところを見比べることによって、それぞれの作品をより深く見てもらう一つの手がかりになるようにもしています。

日常生活を描きだした作品、日常の中に異質なものが投げ込まれて奇妙な情景が生みだされている作品、日常を抽象的にとらえ直した作品など、暮らしの光景から出発してそれぞれの作者の様々な思索をたどり、私たち自身の思索につなげていくことができるのではないかと思います。

続くコーナーは「いろんなものが 生きている」。動物や植物はもちろん、目に見えない細菌、絶滅した生物、更に架空の生きものも、生きているものとして形づくられてきました。かつて錬金術では、鉱物も成長すると考えられていたのだそうです。生命の

宿ったいろいろな生きものの形もまた、美術が描き、形づくろうとしてきたものでした。

会場では一つの画面にたくさんの生きものを描きこんだ小林敬生の《蘇生の刻 - 緑の星・A-》と山野千里の《流水祭り》(図2)を見比べられるように展示しています。前者が黒一色の緻密な描写を特徴とするのに対し、後者は明るい色彩で漫画的な光景を描きだしていますが、いずれも多様な生命を讃えているのではないのでしょうか。山野さんは展覧会のポスターにもなった《ヒラメサーファー》のような陶芸作品でも、人間と動物が入り交じって生き生きと動き回る世界を表現しています。

「生きていると いろいろある」と題した3つめのコーナーでは、生きているものが直面する困難、そして困難に直面したときの感情の表現に注目しました。ピカソの《泣く女》や奈良美智の《どんまいQちゃん》には、作品の背景がわからなくても、人物の表情や仕草の描写に、感情を揺さぶられます。

怒りをあらわにする人物を中心にすえたジェフ・ウォールの《The Outburst》もそんな作品です。顔を激しくゆがめ、全身に力をこめて感情を表す人物は、しかし何を怒っているのでしょうか。英語の題名は、「感情を爆発的に強く表に表すこと」といった意味です。怒る人物と、周囲のつきはなしたような平静さ。この落差も、作品の謎めいた複雑さを高めています。

生きるものが直面する困難の中で最大のものは、死ぬことでしょう。生きることについて考えることは、死について考えることでもあります。逆に死を通して生きることによって迫った作品も、古来多く作られてきました。ブリューゲルの《死の勝利》やホルバインの《死の舞踏》などが思い起こされるところです。この展覧会では父親の死をきっかけに描かれた星野眞吾さんの《喪中の作品A》(図3)を通して、死に立ち会った者の表現の一つのあり方を見ています。

ところで、現象としての生は、まったく抽象的なものです。私たちは、心臓や血管などの臓器によってかたちづけられた具体的な身体の活動があって生きているわけですが、では生命そのものはどこにあるのかというと、そのような身体の活動に支えられ、身体とともにありながら、身体に従属するのではなく、また無生物にはないような形で、身体の中に宿っているように感じているのではないのでしょうか。そんなことを感じる感情の動きや思考は、生命とともにある心や魂の活動であり、例えば単に脳の細胞の活動に過ぎないと言われると、そうではないのではないかという気がしてしまうものです。

科学的に真実であるかどうかは置いて、魂といったものの存在を表現することも、美術が取り組んできたことでした。

ジャン・アルプの《境界彫刻》と山添潤の《魂のかたち amabiki 2008》(図4)は、いずれも白い大理石を彫った作品です。ア



図4 山添潤《魂のかたち amabiki 2008》2008年

ルプの作品は、つるつるに磨かれた表面が波打ち、それ自体が生命を持つもののようです。山添の方は作家がふるった細かいノミの跡に全体を覆われ、石を打つという作者の行為が石の塊のなかに生命となってこもっているかのようです。

作者の行為がかたちとなって残されている作品からは、命ある作者の運動や息づかいを強く感じることができます。白髪一雄の《地察星青眼虎》や孫雅由の《空間の間に》(図5)のように、激しい線が残された作品はもちろんですが、浅野弥衛の引く静かな線の中にも、作者の生命の痕跡は静かに息づいているのです。

そしてこれら4つのコーナーの手前、そして会場を一巡して出てきたところに、髟嘔の《Broken Heart》(図6)を展示し、生命という現象を端的にあらわす心臓の鼓動と、破れた心という生きる者が抱く気持ち



図5 孫雅由《空間の間に AC96-20》1996年

の両面を象徴的に示しました。

更にそれぞれの作品には、作品を見るための手がかりとなるよう短い言葉を添えました。

それぞれの作家がそれぞれの作品で取り組んでいるテーマがあり、それはものとして存在する作品にこめられたものであるのですが、見る者が作品を読み解くなかで立ち現れてくるものでもあります。作品を鑑賞するということは、難しく言うとそのような読解を行っていくことに他なりません。美術教育において、そのような鑑賞への取り組みが重視されるようになってきたのは近年のことです。

「なつやすみの美術館」展は、学校に通っている若い世代はもちろんですが、そのような教育を受けてこなかった世代にとっても、作品を見る楽しさを体験できる場となることを願っています。(奥村泰彦)



図3 星野眞吾《喪中の作品 A》1965年



図6 髟嘔《Broken Heart》1968年

——「たまごせんせい」の目指すもの

「なつやすみの美術館」展では昨夏より、和歌山大学の協力を得て「たまごせんせい」とわくわくアートツアー」という取り組みを行っている。これは教員を目指す学生、すなわち「先生のたまご＝たまごせんせい」がピックアップした数点の作品を、来館者と一緒に見て回るといものである。このように説明すると、美術教育に明るい人なら、VTC(ヴィジュアル・シンキング・カリキュラム)やVTS(ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー)、つまりはひっくり返して「対話型鑑賞」をやっているのね、とか、「たまごせんせい」とはファシリテーターやナビゲーターのことなのね、とか、いろいろと難しそうな名前で言い換えてくれることだろう。しかし申し訳ないことに、やっている当人たちは、そういうことを全く意識していない。というより今年のメンバーの多くは、おそらくそういう言葉を耳にしたこともない。「たまごせんせい」は大層「緩い」取り組みなのである。

この緩さは、われわれの事前指導が行き届いていないこととしてお叱りを受けそうだが、担当者としては意図的に設けたものでもある。昨年度は、NEWS76号にもいくらか記した通り、教育学部美術専攻の授業枠に組み込んでもらったこともあり、大学での授業と美術館での事前準備を交互に行うなど、4人の履修学生たちには一定の習熟、到達が求められた。今年は授業としてではなく、昨年度参加した学生2人が所属する絵画部を中心に参加者を募ってもらい、教育学部以外の学生も含めた7人が関わることとなった。そして彼らの多くは、これまで頻りに美術館に出向いていたわけでもなく、来館者に比べて作品鑑賞の経験値が高いわけでも決してない(この時点で、VTSのファシリテーターとしては失格だろう)。言ってしまうと、そんな未熟な彼らを展示室で来館者の前に放り出しているわ

けで、緩い取り組みの割には、彼らには何とスパルタなのだと思われているかもしれない。

緩さの意図に戻ろう。担当者が彼らに期待しているのは、作品解説をできないことである、と言うとおかしく聞こえるだろうか。もちろん事前に展示作品についての説明はひと通りしてあるものの、一度聞いた程度では右から左、自分の中で咀嚼できていないことを人に話して伝えられるわけがない。それとは反対に、解説できない彼らに託すのは、来館者と一緒に「見る」こと、それだけなのだ。

「見る」という行為は、視覚があれば誰でも当たり前に行えることのように思われるが、実際は簡単ではなく、経験を必要とすることである。今号の裏表紙には、「こどもギャラリートーク」を通した「見る」ためのアプローチについて記したが、「たまごせんせい」の取り組みもまた、人と一緒に見ることで、「見る」ことの練習を意図するものである。実際に参加されている方の様子を見ると、誰かの言葉に「ああ、本当だ!」という声が頻りに上がる。つまりわれわれは、見ているようで、気がついていない、見えていないのだ。自分一人で展示を見ているだけでは気が付かないことがいかに多いか、そして自分とは違う視点の一つの作品に対してどれほどたくさんあるのかは、人と一緒に見て初めてわかることである。そしてそれは、作品理解への新鮮な糸口をもたらす。となると、誰より一番たくさんの驚きと気づきを得ているのは、「たまごせんせい」自身であることは言うまでもない。来館者の発言で新たな発見を得、回を重ねるごとに「見る」経験を深めている姿は、何とも頼もしい。そして回を重ねた「たまごせんせい」の一人が言うには、展示室に向かうまでの足取りは緊張もあり毎回重いが、いざ来館者を前にするとスウィ

チが入ると言う。人と一緒に見ることを深めるために必要となるのは参加者の発言だが、参加者の言葉を引き出すための役割を認識し、一つの役柄を演じるように性格のスイッチを切り替えていると言う。「解説ではなく、一緒に見てあげて」とだけ伝えたものの、一緒に見るためにはどうすべきかを、自分たちで導き出している姿がそこにある。

この取り組みには、教員を目指す彼らの将来に役立てば、という意図は昨年と変わらずあるのだが、担当者の意識の中では、もはや子どもを相手にした授業のシミュレーション、あるいは実践的練習という大層な目的ではなくなった。それよりもまずは彼ら自身が、幅広い見方を受け入れることを面白がり、それができる場が他でもない美術館なのだと感じてくれることが、一番の目的となった。そして鑑賞教育とは、決して固定した「教える／教えられる」の関係にあるのではないのだと、彼らの活動を通して担当者自身が実感している。

そしていつか、自主的に美術館で何かをしてみたい学生の集まりとして、「美術部」ならぬ「美術館部」が和歌山大学にでき、夏は「たまごせんせい」として活動しつつ、それ以外の時期にはみんなで色々なところへ展覧会を観に行ったり、当館の展示解説を作ってみたりと、自発的な活動の歯車が回り出すことを、担当者は密かな野望として温めている。(青木加苗)



楽しく見る工夫を凝らした「わくわくシート」



2014年のたまごせんせいたち(別名「TMG7」)
(左から)はらちか、ミサワ、ひーちゃん、たなちゅー、かるちゃん、くぼ、あんなちゃん



「和歌山県立近代美術館・博物館 建築の魅力をさぐる」(3)

講師：DNA 建築・デザインネットワーク 吉田 行雄 氏

(株)黒川紀章建築都市設計事務所 名古屋・東海事務所所長 長谷川 勉 氏

美術館と博物館が本年度で開館20周年を迎えることを記念し、故黒川紀章氏設計による建築の指揮をとられたお二人による講演会を、2月に開催しました。その抄録の最終回を掲載します。(全3回／図版番号は、前号より継続)



講演会の様子



(左から) 長谷川氏、吉田氏



図 24 築地塀とフラクタルの手すり

【吉田】「歴史との共生」の他にもうひとつ、黒川思想には「フラクタル理論」があります。純粋で伝統的な数学に対して新しい幾何学を発見したマンデルブローという数学者による理論ですが、たとえば海岸線も山の稜線も、自然界には、うんと遠くから見ても、うんと近づいて見ても同じ形が見出されるという現象のことです。全体と部分の形が相似しているのです。われわれはそういった自然なフラクタルの形を、建築物の手すりの曲線(図24)などに使ってみようと思ったチャレンジしました。

それともうひとつ、これは黒川の基本思想とは別ですが、「近代」美術館を造るからには「近代」を意識した要素で作りたいと考えました。その一例がこのエレベーターです(図25)。1850年に落下防止装置のついた蒸気式のエレベーターを作ったアメリカのオーチス社は、1889年には電動式エレベーターを開発し、革新的な発展をもたら



図 25 シースルーエレベーター

しました。アメリカでは、より速く、より安全になったエレベーターが、1900年あたりから摩天楼、つまり超高層ビル建設の追い風になったという歴史があります。この歴史をわれわれは近代美術館にひとつ残したいと思い、その時代のイメージで、あのように無骨な機構も外に見せ、近代の象徴である鉄とガラスで構成しました。

これはエントランスのミュージアムショップのカウンターの上にある底です(図26)。



図 26 ミュージアムショップの底 デティール

ここにも近代に対する尊敬の念を込めています。21世紀のデザインは、重いものもできるだけ軽く、自然に見せようとするのですが、近代は、「こういうものを支えるためにこういう力が働くんぞ」という風に力学的なものをあえて見せます。フラクタルとは対極にある、エレベーターの近代的なイメージも、あえてデザインとしてとりあげています。

博物館の副館長室の窓も、開けるための機構をあえて見せています(図27)。今、窓というのはなんとなく自然に開き、わたしたちに機構を意識させませんが、風を入れるために、もともとはこういう単純な機構からだんだん今の窓に発達してきました。「暑いですね」といって窓を開けて見せる行為自体が美しいので、そういうものをデザインに取り入れたらどうなるのかというひとつの実験です。また手前の手すりは先ほどのフラクタル曲線で形作っています(図27)。

【長谷川】 この窓は、われわれのまったくのオリジナルです。イメージは潜水艦の丸い窓。窓全体が全部ガラスですが、開ける場所もちょっとあったほうが良いということで作っています。ガラスはもちろん強化ガラスで、ちょっと傷が入ると車のフロントガラスのよう



図 27 円形換気窓とフラクタルデザインの手すり



図 28 フラクタルデザインの椅子



図 29 博物館エントランスホール

にクラッシュします。クラッシュしないようにガラスに穴を開けてから熱を加えてはめ込みました。

【吉田】 以上が主な話ですが、フラクタル理論を応用したデザインは和歌山県立近代美術館が初めてで、すべてオリジナルで考えました。その一番特徴的なものは今みなさんの横にある椅子です。(図28)

【吉田】 床にある四角いかたち(図29)これは奈良市写真美術館から使い始めましたが、一二三石^{ひふみいし}といいます。京都の修学院離宮のものを引用しました。1、2、3、1、2、3というリズムをデザイン化することで、何となくあっちにも行ってみたい、という効果を生むと考えました。美術館・博物館は静かで動きがないところですから。

【長谷川】 適当に散らしているように見えますが、実は四角いかたちは全部図面上に配置を落とし込んで、ここはちょっと多そうだからこっちに振り替えようとかいいながら、何丁目何番地まで全部決めて、それを黒川に見てもらって決まったものです。床の材料はテラゾーで、そこに金属のチップを埋め込んで一緒に磨いたものを使用しています。

【吉田】 テラゾーとは石を砕いて固めたものです。それに対し修学院離宮の一二三石は、土に石を埋め込んでいます。つまりここでは反転させているんですね。そして石で仕上げる部分を金属に置き換えました。これも歴史を新しいものに置き換えるという一つの操作です。

これが黒川によるフラクタルのイメージです(図30)。こういう数式(図31)を解いて、さきほどの自然界を解析しているのがこのフラクタル理論です。手すりやドアノブなどをすべてこのフラクタル理論に基づいて作りました。冷たい感じではなくて、自然と手にフィットするようなものを作ろうと、和歌山で試行錯誤して第一号を作り上げました。今は既製品として出ています。

実際の数式(図31)の一部をとって手すりにしましたが、美術館・博物館のこういった大きなものについては、やはり自然界のものを読み解いたものにしようと、紀の川、有田川の地図をばーっと広げて、そのなかで階段の段とうまくマッチする場所を見つけて再現しました。(図32)

その他にも歴史的な引用として用いてい



図 32 博物館 県内の川をモチーフにしたフラクタルデザインの手すり

るのが屏風ですね(図33)。ガラス素材でバランスを考えながら配置しています。

駆け足でしたが、我々の遠い記憶を思い出しながら説明させていただきました。

(編 浜田拓志)

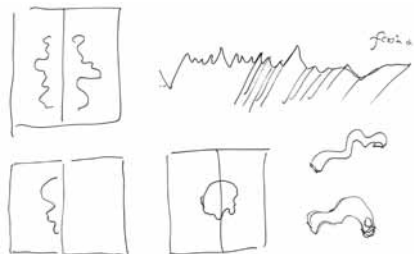


図 30 黒川紀章によるスケッチ 4 フラクタル

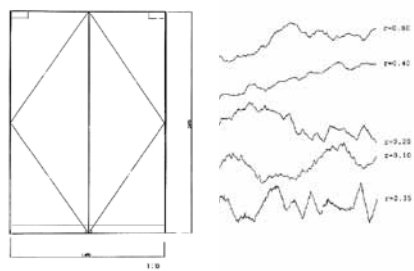


図 31 フラクタル検討図



図 33 博物館 ガラスの屏風

近代のカブキ者・バンカと「田園趣味」

特集展示 没後50年 野長瀬晩花

2014年9月13日—12月7日

洋帽を傾けマントをさらりと着こなす美青年——それが今回特集展示で紹介する日本画家・野長瀬晩花^{のながせ・ばんか}(1889-1964)です(図1)。外国人と間違えられるほど日本人離れした容姿の晩花は、ファッションに強いこだわりを持っていました。風変わりなトルコ帽にマント姿、はたまた、西洋の「モダンガール」をまねた女装姿の写真もありますが、奇抜ながらもあか抜けています。宇野浩二の小説『青春期』にも晩花をモデルにした人物がカフエー・パウリスタに登場する



図1 32歳の晩花 1921年

シーンがありますが、なんと人形の首をぶら下げた婦人物の帽子をかぶった奇人として描かれています。^(註) 晩花はその風貌に違わず、近代の京都画壇でも異彩を放つ存在でした。

現在の和歌山県田辺市中辺路町近露に生まれた晩花は、大阪・京都に出て画を学び、明治末から大正初期には、友人の秦テルヲや竹下夢二らと遊蕩にふける生活を送りながら、個展を中心に大胆で奇抜な作品を発表しました。1918年には、京都で創設した国画創作協会(通称、国展)で、洋画的な表現を採り入れた大画面の日本画を制作しました。

晩花は人物画、特に多くの女性像を描きましたが、作品の変遷を辿ると、国展創設前の1916、7年頃を境に興味が大きく変化しています。はじめは京都の花街に取材し、《女人図屏風》(図2)など華やかで艶美な女性を描きますが、やがて《秋の頃》(図3)や《島の春》(当館蔵)のように農婦や牧歌的な風景などが多くなります。当初は浮世絵の官能的な美人画の表現へ関心を抱いていたものの(図4)、当時の京都画壇では、大原女などの京都郊外の農婦や田畑の風景を主題とする「田園趣味」が流行しており、ポスト印象派のゴーギャンの影響も受けて(図5)、健康的な美を追求していきます。

例えば、1916年の《島の女》(図6)は、ゴーギャンの描いたタヒチの女性を日本の女性に置き換えて表現した「和製《タヒチの女》」ですが、輪郭線に朱を用いるなどの鮮やかな配色や、縦長の画面に6人の人物をすっきりと収めた構図に、ゴーギャンと異なる独自の洗練された感性が表れています。また、《女人図屏風》などの妖艶な女性を描いた作品では、大正期に流行したトラップ模様など、着物に凝ったデザインがあらわれるのに対し、《島の女》は無地の着物姿で描かれています。ゴーギャンの作品にも見られるモチーフを色面で構成する手法は、無地の着物を着た人物の飾り気のない澹刺とした美を描き出すと同時に、ダイナミックな力強さを表現することに成功しています。

大正初期の「田園趣味」やゴーギャンの作品は、自然豊かな故郷近露を出て、京都の頹廢的な文化に染まりつつあった晩花の心に眠る郷愁を呼び覚まし、前衛的でありながら素朴さを感じさせる晩花特有の画風を確立させたと思われます。晩花のモダンな感性と素朴な感性が織りなす心地よい美を、ぜひ当館でお楽しみください。

(藤本真名美)

(註) 宇野浩二『青春期』実業之日本社、1948年



図2 《女人図屏風》1916年頃 田辺市立美術館蔵 ※熊野古道なかへち美術館「没後50年野長瀬晩花」展で2014年10月25日～12月7日まで公開



図3 《秋の頃》1917年頃 当館蔵



図4 晩花の絵画帖(1910年、当館蔵)より



図5 晩花によるゴーギャンの木彫像の模写(年代不詳、当館蔵)



図6 《島の女》1916年 当館蔵

教育普及活動より

ゆっくり、見ましょ。 —大人も一緒に、こどもギャラリートーク

作品を見るときにどう見れば良いのでしょうか、と尋ねられることがあります。また同じくらい、作品にもっと解説を付けてほしいと言われることもあります。確かにキャプションや解説を通して、作品についての情報を提供することは私たちの仕事ではありませんし、筆者自身も他館の展覧会では、作品が作られた背景や歴史に触れ、新しい知識を得ると満足します。しかし例えば展示室に並んだ100点の作品を1時間で見て回ろうものなら、ひとつの作品にかけられる時間はたった36秒。そのうち解説を読むと、どのくらい作品に目を向けているのでしょうか。「どう見れば良いか」という問いに対しては、自戒も込めて「まずはもっとよく作品を見てみませんか」と思うのです。

この見ることに徹するためのきっかけとして、「なつやすみの美術館」シリーズでは、「こどもギャラリートーク」という事業を実施しています。一つの作品に時間をかけ、しかし普段とは違った見方を通して、作者の視点を追体験できるように、あるいは再び作品を新鮮な目で見られるようにと、それぞれに「小道具」を準備して実施しています。今回取り上げたのは3点、そのうちのひとつが、このNEWSの表紙作品《くさむら12》です。

この作品は絵画ですから、当然ながら壁にかかっているわけですが、「くさむら」なのだから立面ではなく水平面で見てみ

たらどうだろう、という単純な思いつきをきっかけに、作品写真を原寸大に拡大してプリントアウトしてみることにしました。レーザープリンターで部分部分を出力しただけの簡単なものですが、まずその一枚を見て、本当にサイズが合っているのだろうかと不安になりました。というのも、描かれているモチーフが、あまりに大きく感じられたからです。

実際のトークの場面で、その繋ぎあわせのコピーを床面に広げてみると、確かにサイズは全く同じであるはずなのに、やはり描かれたものの大きさが強まって感じられました。また見る視点が違うだけで、たくさんの発見があります。ただのコピーなので、その「くさむら」の中に靴を脱いで入り込んで見ることもできますし、描かれている場に近い視点で見ることできます。さらに画面内の空間が上に行くにつれて歪んでいることも際立って見えてきます。その上で、壁に掛けられた実際の作品に再び目を向けると、さっきまでとは違う見え方ができ、作品の面白さを知ることにつながることを期待しています。

その名の通り、こどもを主な対象としている事業とはいえ、大人の方が真剣に楽しんでくださっている向きもあります。「見る」ことを通して「知る」に辿り着ける仕掛けを編み出すこと、それを担当者の課題として、来年も頭をひねることになりそうです。（青木加苗）



大人も子どもと一緒に、床に置いた原寸大の「くさむら」をのぞき込みます

メールマガジン・Facebookページ twitterのご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページより登録いただけます。またFacebookやtwitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

TO
THE
MUSEUM

友の会
会員特典
いろいろ

1. 展覧会の無料観覧（同伴者1名まで）
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加
（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
6. 版画の頒布会への参加

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690 担当：松原

MuseumCalendar

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

和歌山から始まる旅 観光する美術

11.1(土) — 12.7(日)



絶景を楽しみ、自然の中でリフレッシュする。異文化に触れ、自らを知る。「見たい」「知りたい」という欲求から、美術館のコレクションを「観光」する展覧会です。

稗田 一穂
《幻想那智》
1979

つくはえ 『月映』展 田中恭吉・藤森静雄・恩地孝四郎 —木版にいのちを刻んだ青春

2015.1.17(土) — 3.1(日)

和歌山市出身の田中恭吉と、その盟友・恩地孝四郎、藤森静雄の三人が独自の表現を世に問うた詩と版画の作品集『月映』が刊行されて100年を迎えることを記念し、その全貌をふり返ります。

和歌山と関西の美術家たち リアルなリアルなリアルな

2015.3.14(土) — 5.10(日)

和歌山出身者を中心に、関西で活躍する新進気鋭の作家たちを紹介する展覧会。さまざまな技法や素材を使いながら独自の表現を追求している、1970年から80年代生まれの作家たちの「リアル」の感覚を探ります。

出品作家 伊藤 彩(1987-)・大久保 陽平(1984-)・岡田 一郎(1976-)・君平(1974-)・小柳 裕(1977-)

コレクション展 2014 一秋 特集：没後50年：野長瀬晩花

9.13(土) — 12.7(日)



野長瀬 晩花
《島の女》
1916 頃

コレクション展 2014/15 一冬 特集：コレクション/ドネーション

12.16(火) — 2015.2.22(日)



西田 潤
《No.3-A 絶》
2001

コレクション展 2015 一春

特集：『版画』の明治
—印刷と美術のはざま—
2015.3.17(火) —

【その他】

第68回和歌山県美術展覧会
I 10.15(水) — 10.19(日)
II 10.22(水) — 10.26(日)

